た。受け入れ後には、被災者の方に対して春の歩け歩け大会や、グラウンドゴルフ大会への参加を通じて地元との交流を促しました。しかし、まだ落ち着かない状態のようで、参加の希望者はありませんでした。

校庭に万国旗に代わる大漁旗 久々に響く子どもたちの歓声

5月24日、地元の昔話「平筒沼ものがたり」（佐々木智さん編集）を井崎米子さんの朗読で聞いていただく機会を設けました。この話は昔、戸倉から行商に来ていた人の物語ということで、南三陸町の被災者の皆さんに好評を博しました。

6月に入り、PTA参加の授業参観などの学校の行事も通常通り開催されるようになりました。避難者の方々からは、昼食の提供などの要請が増えてきました。

戸倉小学校と戸倉中学校に関わるボランティアの方々も定着してきたので、地元コミュニティ運営協議会、東京災害ボランティア、市社会福祉協議会米山支所などの皆さんで打ち合わせ会議を持ちながら、さまざまな要請に対処できるように役割分担を決めていきました。当吉田コミュニティ運営協議会は「自分たちができる範囲の中で速やかに対応する」ことを合言葉に活動しました。

7月2日、戸倉小学校スポーツ大会。雲一つない青い空、万国旗に代わる大漁旗が旧善王寺小学校の校庭にはためきました。久々に響く子どもたちの歓声。善王寺地区に、こんなに人がいたのかと思われるほどのにぎわいでした。地元区長会をはじめ、各ボランティアグループが出店を担当しました。開店前から長蛇の列ができた「かき氷コーナー」を担当した吉田公民館の高橋和恵さんからは、「手が凍傷になっちゃう」とのうれしい悲鳴も上がりました。子どもたちの笑顔がはじけた一日となりました。

7月7日、七夕飾りの竹竿探し。戸倉中学校の谷山知宏教頭先生が、この震災で学校が旧善王寺小学校に移ってから、自前で新車の軽トラックを購入したとのことでした。この軽トラックが通勤や物資調達に大活躍している中、七夕飾り用の竹竿を近所から見事ゲットし、目的を達成することができました。先生方の一生懸命な姿が子どもたちにしっかり伝わっていることを確信しました。

まだいてほしい、いたい… 万感の思いで卒業生見送る

この時期からホンダのアシモ君の実演が善王寺コミュニティセンターで開かれるなど、企業や各団体、芸能人、スポーツ選手などが続々とボランティアで来校し、子どもたちに元気を与えてくれました。

11月3日、戸倉中学校の文化祭で、昼食ボランティアを実施しました。メニューはカレーライスで、どの生徒も満腹になること受け合いでした。提供後、生徒たちの素晴らしい作品を鑑賞した時、絵画コーナーにくぎ付けになりました。生徒たちの、対象を良く見る姿勢に驚かされました。

平成24年2月18日、戸倉小学校・戸倉中学校の感謝の会。旧善王寺小学校にいてほしい、いたい…。さまざまな思いを胸にお別れの会が開催されました。

子どもたちからお世話になった皆さんに、また、子どもたちから頑張る力をもらった地元の皆さんから、子どもたちへプレゼントを交換しました。「ありがとう」の言葉に万感の思いと涙、握手のぬくもりに、明日を信じられる心が大きく膨らみました。

3月16日、戸倉小学校の卒業式と卒業ライブ。旧善王寺小学校から、まさか巣立つ子どもたちを送ることがあるのかという不思議な気持ちになりました。戸倉小の麻生川敦校長先生の温かな式辞、それから先生方や力を合わせた戸倉の子どもたち、地域の皆さんと過ごしたこの1年間を思い起こしました。皆さんとわずかながらも関われたことに感謝の気持ちがいっぱいになった素晴らしい卒業式でした。

3月23日、まだまだ続く熱い絆。戸倉小学校の子どもたちが南三陸町に戻った後も、戸倉小学校の少年野球チーム「戸倉ブルーウェーブ」から、練習場所がないため、旧善王寺小学校の校庭を利用したいと申請がありました。市教育委員会に働き掛けた結果、4月1日から練習が可能となりました。（平成25年10月）現在も旧善王寺小学校での練習を継続中です。

震災からの1年間、本当にコミュニティの底力を感じさせられました。まだまだ問題が山積しています。現実を見つめ、着実に進んでいこうと今、決意を新たにしています。

自主防災組織の育成 防災用品を整備

市では、自主防災組織の結成を推進、平成21年度末に全ての行政区で自主防災組織が結成されました。自主防災組織が東日本大震災で活動した際、当時不足した備品や必要だったものを整備するため、平成24年度に自主防災組織に対する補助事業を実施しました。整備した用品を災害時に活用するほか、日頃の防災訓練でも活用してもらうことが目的です。また、災害時の初動活動に生かせるよう、自主防災組織を中心とした防災訓練を実施。各地区の自主防災組織の研修会を通し、市民の防災意識のさらなる向上を目指しています。

▲大規模災害を想定した防災訓練

●支え合いから生まれた新たな絆❷

避難者、地域、ボランティア 新しい地域づくりの原型に

南三陸町の避難所として 廃校校舎に明かりがともる

3・11東日本大震災は、私たちに大きなショックを与えました。同時に、私たち以上に大きな被害を受けた被災地に対して何もできないジレンマも感じさせました。

地域内でも家屋の被害があったものの、人命に関わることが少ないことは幸いでした。そうした中、3月19日に旧鱒淵小学校の体育館に明かりがともりました。RQ市民災害救援センターの皆さんが、災害地支援物資の東北本部基地としての活動を始めたのです。地域の住民は、最初「いったい何者が?」と不安の念に包まれる感じで見守っていました。

津波で大きな被害を受けた南三陸町の中瀬地区が鱒淵地区を指定し、旧鱒淵小学校を「避難仮設宿舎」として活用を開始したのは4月4日のことです。震災の前日まで農作業や漁業など、家業に一生懸命だった人たちにとっては、住む家も何もかもなくしてしまった無念と、これからの不安が募る中での避難場所「鱒淵」でした。

近隣地で親類、知人も多い中、鱒淵地区では「私たちにできることをやろう」と、その役割を話し合いました。誰かに頼まれたり行政に依頼されたりして動く、今までとは違った「できることを、できることからやる」というボランティア活動が、地域活動につながっていった気がします。

旧鱒淵小学校に、南三陸町中瀬地区から約120人の方々がバス2台で来ました。地域あげての出迎えと、商工会や婦人会有志の方々による昼食の提供がありました。親類、知人との無事を確認し合い、再会の喜びに話が弾むひとときでした。数年前に廃校し、特に使用がなかった校舎全部に明かりがともりました。生き返った施設となり、命が吹き込まれたようでした。

今までの避難場所での食事は、炊き出しはありましたが、おにぎり中心で、この寒さの中で冷たく、インスタント食品が主であったこと、寝る場所はすし詰めの体育館、脚を伸ばすことはできても寝返りもできず、相手の頭に足が届く始末とか。特に夜のトイレは人を踏みつけないように静かに探し、高齢者が夜中に使用するには体にこたえたとの話も聞きました。この鱒淵に来てからは温かい歓迎が身に染み、特に「温かいご飯とはっと汁をおいしくいただいた」という声が聞かれました。

東和町鱒淵
小野寺 寛一 さん

あの震災を 特集 忘れない